

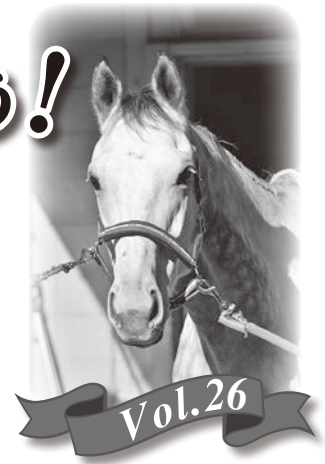
ドレッサー・ジュホースに育てよう!

ピアッフェ・パッサージュ Part2

6月中旬以降から7月に入り、オースミレブンは、調教当初から抱えている左肩が出なくなるという跛行を2度も発症してしまいました。それまで長期間にわたりごまかしながらも運動を継続してきたのですが、トレーニングを中断せざるを得ない状況になってしまいました。いろいろな変化が出てきていただけに残念です。獣医師からは、左肩内部の筋肉組織の炎症と診断されました。負荷のかからない運動から徐々に立て直していきたいと思います。

さて今回は、グランプリクラスに求められるピアッフェ・パッサージュの前段階の運動である《ハーフステップ》について説明しました。このハーフステップは、日々運動の最後などに、短い時間でよいので長期間継続します。そうすると、馬が歩幅を縮めながら、速歩の動きを止めず収縮していくことを学習していきます。

今回は、これまで積み重ねてきたトレーニングを応用して行う《パッサージュ》についてまとめてみたいと思います。



速歩は変わる!

速歩運動は、駈歩や常歩運動よりも、調教を進めていく(収縮度が増していく)に連れて動きが変化していきます。馬の前進するパワーを馬体に集める(収縮・コレクト)ことによって、馬は飛節や膝を曲げて弾発を生み出すようになり、それが、パッサージュという運動に変化していきます。もちろん、どの馬でも収縮させればパッサージュ歩様になるというわけではありません。それぞれの馬が持つフィジカル面のクオリティの問題による部分が大きいのです。しかし、我々が「この馬は絶対にできない」と決めつけて諦めるのではなく、騎手が馬に正しく収縮を求められる技術と根気を持ち、継続してトライし続けることも必要です。ヨーロッパで血統的に馬場馬として生産された乗用馬は、当然これらの運動能力を持っている確率が高くなります。彼らは、馬体の使い方や備えている力、関節の柔らかさ、肩の角度や元々持っている歩様など、生まれ持っているフィジカル面のクオリティが高くなっています。

一方、サラブレッドの歩様や肢さばきは、乗用馬のように大きなモーションではなく、必要最低限の経済的な動きをするのが一般的です。なぜなら、競走馬は速く走るために回転数を上げる必要があり、大きなモーションはマイナスだからです。そのため、サラブレッドに動きが大きく、力強さが必要となるパッサージュを求めることは容易ではありません。しかし競走馬においても、放牧したり興奮したりした際に、パッサージュのような動きをするを見たことがある人も多いと思います。もともとパッサージュは、馬が高揚した気持ちで心身共にフレッシュな状態の時に自然に行う動きです。そのため、サラブレッドであっても、騎手の正しい半減却から収縮と透過性を求めて、弾発を生み出すことに努めることによって、パッサージュ歩様を求めることができます。オースミレブンを調教を始めた頃は、興奮して暴れたりした際に、パッサージュ歩様のような動きをすることがありました。それらを強化するようにハーフステップなどを繰り返し、騎手からの扶助と結び付けていきました。

以下のフローチャートは、パッサージュをするために騎手の扶助で導く現象の過程をまとめたものです。当然ですが、乗用馬であってもサラブレッドであっても騎手の扶助は全く同じです。



半減却 → 透過性 への方法

半減却は、馬体に前進氣勢が充満している状態にするための扶助を言います。

ここで、パッサージュに至るまでの最初の扶助となる半減却の方法と、透過性を求める方法をまとめてみたいと思います。

半減却を行う上で、以下の手順のイメージを持ちながら行います(常歩から速歩への場合)。

1. 停止から常歩発進をして常歩運動での準備をすること

- ① 常歩であれ、前進している運動であれば半減却は実行できます。まずは後ろ肢から活発に前進している常歩の状態を作ります。
- ② 馬の前進意欲(足りない場合のみ騎手の脚扶助によって促す)と、それを受ける《正しいハミ受け(透過性)》を確認します。この時、馬がハミ受けをせず、ハミに突き出したり抵抗したりしては、前進氣勢が馬体に溜まることはありません。

- ③ 馬が前進しようとする意欲を、実際に前に進むのではなく、馬体を縮ませてその意欲をなくさせることなく馬体に溜めるために、騎座の推進（必要に応じて脚扶助で推進）と手綱扶助で馬を丸める（ハミ受け）体勢にすることを同時に行います。

2. 常歩から速歩へ移行（パッセージを求める）する際に準備すること

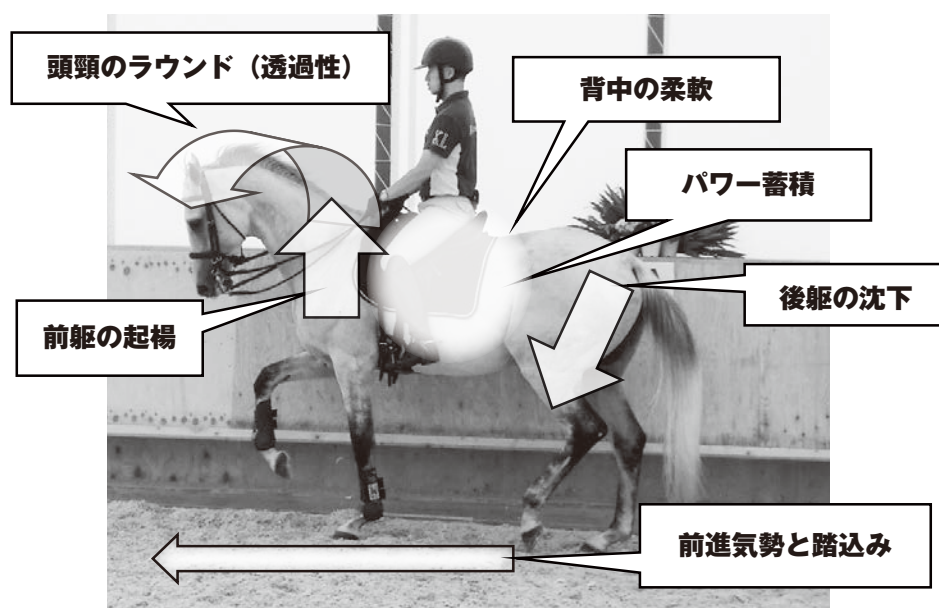
- ④ パッセージを求めるため脚扶助で速歩発進を試みますが、推進を溜めるため、恐らく強くハミに出てきます。そのため、事前に手綱扶助（拳）を使って馬を丸めておきます。もし馬が、素直にハミを受けずに抵抗してくれば、騎手はハミに対して拳を控えてプレッシャーを与えます。その方法は、ほんのわずかに内方姿勢をとり、馬を丸くする“きっかけ”を作ります。具体的には、外方手綱は支点とするためやや強く控えます。そのままだと馬は外を向いてしましますが、ここで内方手綱をやや開くように頭頸全体を内方に向くように使います。馬が内方を向いたら内方手綱を緩めます。そうすると馬は外方の支点に引っ張られ真っすぐになります。同時に外方手綱もわずかに緩めて、手綱扶助に反応してくれた馬を褒めるようにプレッシャーから解放します。そうすると馬は力みを減らし“わずかなりラックス”を感じます。しかし、通常こんなに簡単にはいきません。恐らくまた頭頸を強張らせてきます。なぜなら後肢からの推進は続くからです。そのため再び最初の作業に戻ります。上記下線部の、外方手綱を持ち直し、内方手綱を……を何度も繰り返します。

- ⑤ 脚扶助によって推進力を増加させ、その推進力がハミに強く出てくるようにします。この時、馬によっては、頭頸が上がったり、前にのめったりしようとします。頭頸が上がるという反応をする場合は、④の方法を何度も繰り返します。

頭頸が下がる場合は、手綱操作をほとんど使わず、極端に言えば「ハミ受けをさせない」ようにして鼻面を前に出し、頭頸を上げることを優先します。そのためには、脚扶助で後肢を活発に動かし、なおかつ手綱扶助は極力使わず、もし馬がハミに寄り掛かるようにしてきた場合は、手綱を持ち続けるのではなく、わずかに拳を弾くように使います。もし、ここで拳を使ってしまえば、馬はまたハミにもたれて寄り掛かってきます。馬の後肢を活発に動かし、馬体下に進出させ後躯を沈下させて、前躯が上がってきやすいように全体の体勢を変えるイメージを持ちましょう。

- ⑥ 騎座で前進氣勢を抑え馬体に溜めます。

頭頸の位置が安定し透過性を保つことができるようになると、いよいよ本格的にパワーを馬体に溜める扶助に入ります。パッセージをトライする際も最初は速歩で動き出します。この時の手綱扶助は、前に行くパワーを抑えることと、ハミ受けをさせて透過性を保つことをミックスさせます。そして、パワーを溜める騎座での扶助を最大限に使います。騎座で馬の動きに同調し、動いて推進していた割合を抑え、前に行こうとする馬を抑えます。そして、後肢を活発に動かしながらバランスを起こします。もし、前進氣勢を溜めることによって、馬のエンジンが切れてしまうようであれば、脚扶助や鞭で刺激してもよいでしょう。前躯を起こす（起揚）ためには、後肢が踏み込み、後躯が沈下していくことも必要になるからです。そして、最終的には拳によるハミへのプレッシャーを限りなく小さくしていきます。



パッセージのイメージ図

パッサージュのために推進力を増して馬体にパワーを充満させる過程で、調教初期から行ってきたハミ受けにおける馬との関係が問われます。オースミイレブンの場合は、ハミ受けの関係が完全に確立していないところもあったため、パッサージュのために強い推進力を加えると、当然ながらハミにさらに強く出て頭頸が上がり、背中が緊張する事態になりました。やはりサラブレッドにパッサージュを求めることは容易ではありません。この運動の初期段階では、フィジカル的にその要素を持ち合わせているかを判断し、それを引き出すために我々が何を求めているのかを馬に理解させることが必要です。そのためには、文章で書くような綺麗事ばかりではありません。前に行きたくても行けない状態になっているのに推進を求められている馬は、時にパニックさえ起こします。そのため、騎手はその馬の精神状態を理解し、要求度を調節する必要があります。脚で推進し続け、拳で引っ張り続ければ、どんな馬でも苦しくなります。自分自身に置き換えれば容易に理解できるでしょう。

まず私は、こうした要求度を上げる運動をする場合こそ、馬上から「今の状況で馬はどう感じているか？」というアンテナを常に張っています。我々が使う扶助は常に、“オン”と“ニュートラル”の組み合わせです。騎座においては、“強気の騎座”と“優しい騎座”を使い分けます。脚扶助や鞭からの推進に対しては、馬が反応したら使い続けられないことに注意します。手綱扶助は、推進力を踏まえてハミへのプレッシャー加減を変え、状況がどうあれ「一旦譲る、そしてまた使う」という考えを持ちながら、馬をがんじがらめにしないことが必要です。我々は、馬と喧嘩しても勝ち目はありません。そうではなく、常に馬を冷静に見て、感じて、判断することができなければ、どんな運動でも調和は生まれません。

今回は、パッサージュをするための下地作りから考えました。次回は、**収縮** → **弾発** → パッサージュへの過程を考えます。